

## 甲州における近世の通婚圏

溝口常俊

## 一、はしがき

封鎖性の強いとされている近世の村落は、一体どの程度他村落と交流があったのか、通婚圏を指標として検討してみたい。

通婚圏が一種の地域的社會圏を示し、その封鎖性や開放性を示す有力な指標であることについては、これまでも数多く指摘されている。それらの研究は大別すると、地域的機能類型から考察したものと、階層区分から考察したものがある。

前者は、地域を都市、農村、山村、漁村等に分類し、それぞれの通婚圏を比較したもので、井戸庄三、関口武・森藤勝元、池田義祐、佐々木永徳らの論考がある。これらの研究によると、一般的に隔絶性の高い山村や漁村において通婚圏が狭く、都市や農村において通婚圏が広いという結果が導き出されている。この際、通婚圏とは、「婚姻によって婚舎をつくるために、当事者の一方が他の当事者の所へ居住地を移転する地域的範囲」<sup>(7)</sup>であり、通婚圏を決定する尺度として、ある地域（市・町・村・部落…）の全通婚数に対するその地域内での通婚の占める割合（内婚率）をもちいている。これに対して合田栄作は、面積が同じでないと、内婚率の大小と通婚圏の広狭と

の関係は不明であるとして、ある地域の一キロ平方メートル当りの内婚率（内婚率密度）をもって「通婚率」を定義づけているので、従来の研究結果とは逆に、山間町村の「通婚圏」が広いという結果が出ている。<sup>(8)</sup> たしかに、面積の異なった市町村別の通婚圏を比較考察する場合は、合田栄作の見解は留意されるべきであるが、しかし、個々の村落を対象とする場合は、その領域が類似していることから、氏の方法をとらなくてもよからう。それゆえ、藩政村を対象とする筆者は、前述の内婚率を採用しても妥当であると考え、本稿では、それに従って論を進めることにした。

一方、後者については、村内農民を地位、家柄、あるいは田畑所有面積等で階層区分し、各階層の通婚圏を調べたもので、有賀喜左エ門、瀬川清子、山本登、井戸庄三等の研究があり、一般的に上層に遠方婚が多く、すなわち通婚圏が広く、下層に狭いという結果がでている。

以上の研究成果は、いずれも幕末、明治初期以降の研究で、近世においては推測的な部分が多く、実証的な研究はほとんどなされておらず、筆者の管見の限り、わずかに荒居英二、速水融の研究をみるにすぎない。

明治以降においては時代の経過とともに、自部落内婚が減少し、通婚圏が拡大することは、鈴木栄太郎の岐阜県坂祝村の調査からも、関口武・森藤勝元の島根半島中部村落の調査によっても明らかにされている。この事実から推測して関口・森藤は、「村落が完全な全体であり、有機体であった際には、自部落内婚は、一〇〇%おこなわれなかったとしても相当数がなされていた筈である。」と述べて

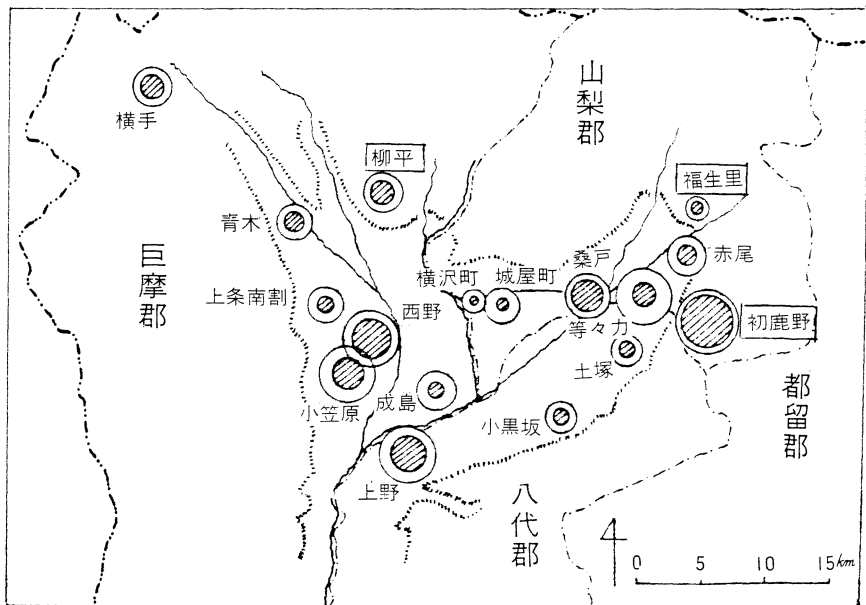
いる。たしかに、山梨県早川上流の隔絶山村である奈良田、湯島では、幕末、明治初期にその自部落内婚率はそれぞれ一〇〇%、八八・九%と極めて高い値を呈している。<sup>18</sup>しかし、荒居英次によれば近世中期における漁村である房州相浜村では五〇%前後であり、更に、速水融の近世中・後期における農村である濃州西条村では二〇%弱にすぎないことは注目に値しよう。これらの事例はいずれも限られた小地域のものであり、一般的な考察を進めるには一層の事例研究が必要となる。

そこで筆者は、近世における通婚圏の一般性を少しでも明らかにするために、甲州を対象地として選んだ。その理由は、甲州には宗門帳等の近世文書が比較的広範囲に残存していて比較考察が可能なこと、政治的領域が天領という同一基盤にあること、による。かくして、甲州のほぼ全域にわたり、<sup>21</sup>しかも、その中に都市・農村・山村が含まれるように配慮して図1に示す一七村落を選出した。

## 二、地域の概観と分析資料

### (一) 地域の概観

都市の例として掲げた城屋町、横沢町は共に、当時人口約一・二万<sup>22</sup>の規模を持つ府中（現在の甲府市）内にある。山村の例として掲げた初鹿野は日川入り、福生里は重川入り、柳平は茅ヶ岳山腹の最奥の村落である。なお、初鹿野は甲州街道沿いにある。農村のうち横手、青木、上条南割は釜無川上流部にあり、山村の色彩を若干帯びている。そのうち後二者は交通量の多い駿信往還山籠道上に位置している。水田農村の成島は甲府盆地中央部の氾濫平地に、畑地農村



等々力の場合

○ 入婚者総数 123人  
 ⊗ 村内婚者数 29人

— 都市  
 □ 山村 他は農村

図1 近世中期甲州村落の村内婚

の西野、小笠原は甲府盆地西部の御勅使川扇状地にある。なお、小笠原は駿信往還の間の宿としての機能を有している。上野、小黒坂は甲府盆地南部の曾根丘陵に位置し、前者は当時甲州で府中に次いで第二の人口規模を有する市川大門に隣接している。土塚、桑戸、等々力、赤尾は甲府盆地東部の諸扇状地上の村落で、大部分が平地で占められている。その中で等々力は甲州街道沿いにあり、勝沼宿に隣接している。

(二) 分析資料

分析資料としては、宗門人別改帳<sup>(23)</sup>を用いた。それには村民各人の宗旨、旦那寺はもちろんのこと、年齢、世帯主との続柄等家族構成が記載されている。その中で詳しいものになると、配偶者、奉公人の出身地が記入されており、これによって入婚圏が明らかにされる。「正徳五年末七月 甲州巨麻郡北山筋柳平村宗旨御改帳」の一部を示すと左記の通りである。

一、代々禅宗甲州巨麻郡北山筋柳平村

林泉寺旦那<sup>㊦</sup>

権之丞<sup>㊦</sup>

年四拾四歳

同寺旦那<sup>㊦</sup>

同人妻<sup>㊦</sup>

是ハ逸見筋岩下村勘右エ門娘拾年

年三拾九歳

以前ニ権之丞ノ妻に成夫と同宗ニ罷成リ、

同寺旦那<sup>㊦</sup>

同人娘

いぬ<sup>㊦</sup>

年十五歳

同寺旦那<sup>㊦</sup>

同人娘

かん<sup>㊦</sup>

年七歳

同寺旦那<sup>㊦</sup>

同人下人

是北山筋阿し沢村作右エ門後家人主ニテ 長右エ門<sup>㊦</sup>

長三郎請人午ノ十二月与酉ノ十二月迄三年 年廿七歳

記ニ右抱申リ、

一方、他村への出婚者に関しては、大半の宗門帳では、その作成年次から過去一年間の該当者のみが書かれているにすぎない。したがって、本稿では入婚圏の分析に中心がおかれることになる。なお、宗門帳の作成年代は、青木の寛文六（一六六六）年から横沢町の天保一三（一八四二）年に至るまで各町村毎に異なっているため、厳密な同一時点での比較はできない。しかし、後述する如く、当時の通婚圏の年次的変化はほとんどみられないので、上記の諸村落の宗門帳の作成年次に多少の年次的ずれがあるとはいえ、以下の比較考察には、なんら支障をきたさないであろう。

三、地域的側面からみた通婚圏

村落の封鎖性の程度を明らかにするために、都市、山村、農村別に村内婚率について検討し、続いて距離圏別に比較考察をおこなう。

(一) 村内婚率からの分析

村内婚率は表1に示したとおりで、初鹿野の六六・四%を筆頭に桑戸、西野（五〇%以上）と続き、以下四ヶ村が四〇%台、三ヶ村

表1 村落の戸口と村内婚率

類型	村落名(現所在町名)	年代(西暦)	戸数(人数)	入婚者総数, うち村内婚者(村内婚率)
都市	1城屋町(甲府市)	天保3年(1832)	55戸(241人)	58, 6(10.3%)
	2横沢町(甲府市)	天保13年(1842)	33(109)	25, 5(20.0)
山村	3柳平(斐崎市)	正徳5年(1715)	78(278)	57, 24(42.1)
	4福生里(塩山市)	明和4年(1767)	27(91)	17, 7(41.2)
	5初鹿野(東山梨郡)	正徳5年(1715)	214(847)	188, 125(66.4)
農村	6横手(大北白須町)	元祿10年(1697)	64(323)	66, 27(40.9)
	7青木(斐崎市)	寛文6年(1666)	53(162)	47, 16(34.0)
	8上条南割(斐崎市)	寛文7年(1667)	55(176)	45, 12(26.7)
	9西野(中白根郡)	享保8年(1723)	156(615)	115, 60(52.1)
	10小笠原(中白根郡)	元祿15年(1702)	125(618)	112, 41(36.6)
	11成島(中白根郡)	天和3年(1683)	90(515)	64, 18(28.1)
	12上野(西八代郡)	享保18年(1733)	188(672)	111, 51(45.9)
	13小黒坂(東八代郡)	寛延2年(1749)	45(192)	33, 7(21.2)
	14土塚(東八代郡)	宝暦3年(1753)	61(195)	34, 11(32.4)
	15桑戸(東八代郡)	宝永2年(1705)	84(372)	80, 43(53.8)
村	16等々力(東八代郡)	宝永4年(1707)	153(673)	123, 29(23.6)
	17赤尾(塩山市)	享保20年(1735)	107(329)	56, 16(28.6)

(各町村宗門帳による)

が三〇%台、六ヶ村が二〇%台であり、城屋町が一〇・三%と最も低い値を示している。この結果は、明治期についての先学の成果と比べて決して高い値とはいえない。したがって、近世中期の甲州の農山村は全般的にそれほど強い封鎖性を帯びてはいなかったものと考えられる。

次に、戸数規模の類似した村落を選出して、村落の機能別に具体的な考察を進めよう。そこで、八八戸(これは文化年間における甲州全村の平均戸数規模であるが)を境にして、それ以下の小規模村落についてまず比較してみたい。

すると、山村である柳平(四二・一%)、福生里(四一・二%)が最も高い値を、都市である城屋町(一〇・三%)、横沢町(二〇・〇%)が最も低い値を示している。その中間値を残りの五つの農村が示し、その中では山村的色彩の強い横手(四〇・九%)と青木(三四・〇%)において高率となっている。

次に、八八戸以上の大規模村落(山村一、農村七)について考察してみると、山村の初鹿野(六六・四%)に高く、農村においては桑戸の五三・八%から等々力の二三・六%まで様々な値がとられている。その差異を二、三の農村をとりあげて考察してみよう。

西野、小笠原は戸口規模が類似していること他に、共に御勅使川扇状地扇状部に位置し、また周囲の村落分布状況もほぼ等しいといった共通の環境をもっているにもかかわらず、前者の村内婚率は五二・一%とかなり高く、後者のそれ(三六・六%)を上廻っている。これは、後者が駿信往還の間宿という他地域との交流関係の強い機能を有しているのに対し、前者は街道から二キロほど離れていて、

そうした機能を持っていなかったことが一因として考えられよう。

日川扇状地扇中部に位置する等々力は、小笠原よりもさらに低い値  
 (二三・六%)しか示していない。これは甲州街道が村内を通過し  
 ている点に加えて、隣接して大規模な勝沼宿があるという関係位置  
 の良さに起因している。実際に勝沼宿からの入婚者は一四を数え、  
 これは入婚者総数の一一・四%も占めている。また、成島が二八・  
 一%と低いのは、甲府盆地のほぼ中央の氾濫平地に位置している  
 という地形的、位置的条件が大きく作用しているように思われる。

以上の結果、近世中期の甲州の諸村落において、その村内婚率は  
 山村で最も高く、農村がそれに続き、都市で最も低い値をとること  
 が確認された。なお、個々の村落の村内婚率の差異については推測  
 的にしか考えられなくて十分な説明はできなかった。封鎖性を持つ  
 要因が複合的に作用していると考えられるので、多視的な検討が必  
 要となるがその点については今後の課題としたい。

(二) 距離圏別通婚率の比較

村外からの入婚者の範囲を知るために、該当町村を中心として半  
 径四キロ圏内、八キロ圏内、八キロ圏外の三区分からの検討をおこ  
 なした。(表2)

まず、山村について検討すると、柳平と初鹿野は村内婚率(四二・  
 一%と六六・四%)は高かったが、四キロ圏内婚率になると、圏内  
 の総戸数が極端に少ない(六五九戸、三八七戸)こともあって、そ  
 れぞれ六三・一%、七二・八%と低い値になっている。それとは対  
 照的に福生里は圏内の戸数が多いため(二、〇〇五戸)、八二・四  
 %と高率を示している。これが、八キロ圏内婚率になると、三者と

表2 距離圏別通婚率

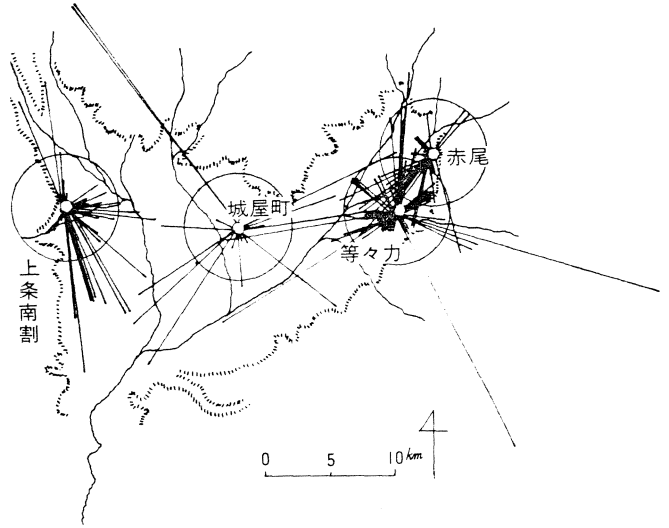
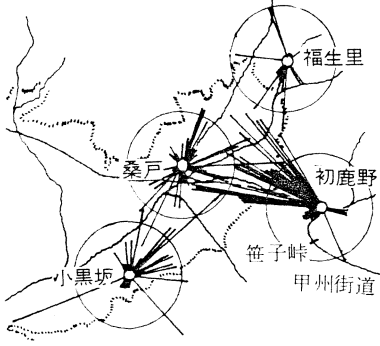
類型	村落名	入婚者総数	4km圏内から	4~8km圏内から	8km圏外から
都市	1城屋町	58人	46人(79.3%)	3人(5.2%)	9人(15.5%)
	2横沢町	25	20(80.0)	1(4.0)	4(16.0)
山村	3柳平	53	36(63.1)	19(33.3)	2(3.6)
	4福生里	17	14(82.4)	3(17.6)	
	5初鹿野	188	137(72.8)	43(22.9)	8(4.3)
農村	6横手	66	49(74.2)	12(18.2)	5(7.6)
	7青木	47	31(65.9)	3(6.4)	12(27.7)
	8上条南割	45	27(60.0)	12(26.7)	6(13.3)
	9西野	115	97(84.3)	12(10.4)	6(5.3)
	10小笠原	112	85(75.8)	19(17.0)	8(22)
	11成島	64	49(76.5)	13(20.3)	2(3.2)
	12上野	111	88(79.2)	16(14.4)	7(6.4)
	13小黒坂	33	28(84.8)	5(15.2)	
	14土塚	34	31(91.2)	2(5.9)	1(2.9)
	15桑戸	80	68(85.0)	12(15.0)	
村	16等々力	123	105(85.4)	13(10.5)	5(4.1)
	17赤尾	56	40(71.4)	16(28.6)	

も九五%以上の値を示し、この圏内に山村の通婚圏はほぼ完全に包  
 括されるといってよからう。

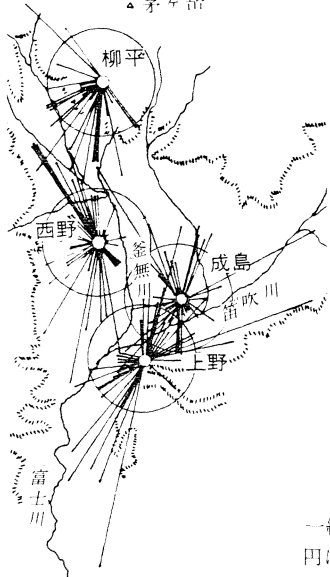
次に、府中の城屋町と横沢町は、町内婚率はそれぞれ一〇・三%、  
 二〇・〇%と対象村落中最も低い値を示していたが、四キロ圏内婚  
 率は共に八〇%もの高率を示し、都市とはいえず、その入婚範囲はほ  
 ぼ四キロ圏内に収まっているといえる。それが八キロ圏外の遠方婚

②上条南割, 城屋町, 等々木, 赤尾の通婚圏

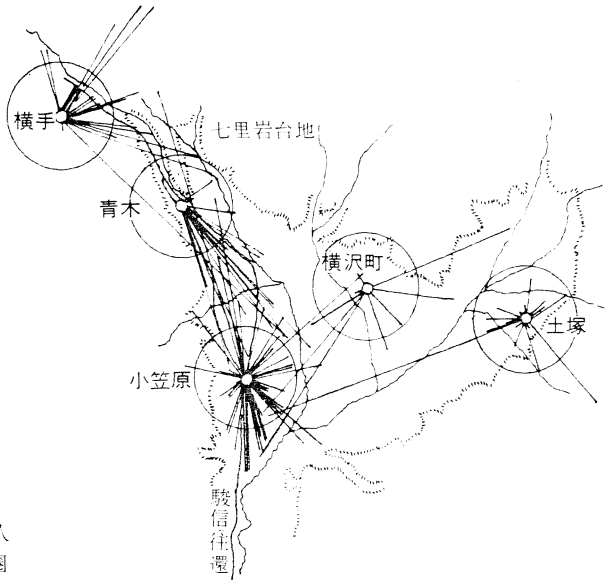
①福生里, 初鹿野, 桑戸, 小黒坂の通婚圏



③柳平, 西野, 上野, 成島の通婚圏  
▲茅ヶ岳



④横手, 青木, 小笠原, 土塚, 横沢町の通婚圏



一線が1人  
円は4km圏

図2 各地の通婚圏

数は農山村に比べて多く、また、配偶者の出身村も多方面にわたり、そこに都市としての吸引力がうかがえる(図2-12、4)。

農村の中で四キロ圏内婚率八〇%以上を占める土塚、等々力、桑戸、小黒坂、西野は八キロ圏内でいずれも九四%以上を占め、入婚圏をほぼ完結せしめている。四キロ圏内婚率は八〇%以下でやや低率ではあるが、八キロ圏内になると九〇%を占める村落としては横手、小笠原、成島、上野、赤尾があげられる。ところが、残りの青木と上条南割は四キロ圏内婚率がそれぞれ六五・九%、六〇・〇%と低率で、しかも八キロ圏内婚率においても七二・三%、八六・七%と低く、遠方婚の多いことを特徴としている。これは、両者が駿信往還山麓道沿いの村落であるとともに、西部に鳳凰山脈を背にした、特に青木においては東部を八ヶ岳泥流である舌状の七里岩台地によって閉ざされた山狭の地にあることが大いに影響している(図2-14)。

山地や河川等の地形的障壁が通婚圏の範囲にかなりの影響を与えている例を紹介しよう。初鹿野の場合(図2-11)、笹子峠があるために、峠を越えた都留郡側の甲州街道沿いに黒野田宿(九三戸)、阿弥陀海道(七八戸)、白野(一〇一戸)等の村落があるにもかかわらず、そこからの入婚者はわずかに一人にすぎなかった。茅ヶ岳山間の最奥集落である柳平の場合(図2-13)は尾根越しの村落から二人のみ、先ほどあげた青木の場合七里岩台地上の村落からは一人、台地以東の村落からは二人を数えるにとどまっている。また、富士川、釜無川が大きな障害となっていることは西野、成島、上野の例によって明らかである(図2-13)。釜無川右岸の西野は対岸

の村落からは二人のみ、同川左岸の成島は対岸からは一人のみの婚入者がいるにすぎない。富士川左岸の上野は対岸の対落からは二人のみであるが、同岸の村落からは下部を筆頭にかなり遠方からの婚入者がみとめられた。

#### 四、階層的通婚圏

階層区分の方法に関してはまだ確立した見解が示されていない。山本登は家系の古さ、政治的指導性、山林所有面積、生業形態、住宅状態、部落費徴収のための等級、および村民税徴収のための等級の七つを指標としてとり、夫々に差別的評点を与え、各々の家についてそれを合計し平均点をとることによって部落の階層構成を五段階に分けて把握している<sup>(27)</sup>。井戸庄三は田畑所有面積で五反以上、一〇五反、一反以下の上、中、下層に分けて、また、一部の村落においては持屋層と借屋層の上・下層に分けて考察している<sup>(28)</sup>。後者のように単一の尺度で区分するより、前者のように、階層化を単純な算術平均で統合している点に疑問は残るが、できるだけ多くの尺度を考慮して区分した方がより妥当であろう。しかしながら、近世においては階層区分に適した規準が多くみいだせないで、とりあえず本稿では、役人層(名主・長百姓・百姓代)と隷属農民(譜代下人、抱屋、門屋)の所持者、奉公人雇用者、店借の所持者を上層とし、他を下層と区分し、その村内婚と村外婚の状況を調べた。

この結果、表3で示したように調査村落中半数の村落において、上層の村内婚率が下層のそれを上廻るといふ事実が判明した。残りの半数の村落においても上層で村内婚がみとめられないのは上条南

表3 階層別村内婚率

類型	村落名	上層		下層	
		村内	村外	村内	村外
都市	1城屋町	1人(11.1%)	8人	5人(10.2%)	44人
	2横沢町				
山村	3柳平	7 (58.5)	55	17 (37.8)	28
	4福生里				
	5初鹿野	7 (87.5)	1	118 (65.6)	62
農村	6横手	6 (42.8)	8	21 (40.4)	31
	7青木	1 (16.7)	5	15 (36.6)	26
	8上条南割	0 (0.0)	5	12 (30.0)	28
	9西野	17 (30.9)	38	43 (71.7)	17
	10小笠原	19 (38.0)	31	22 (35.5)	40
	11成島	3 (14.3)	18	15 (34.9)	28
	12上野	11 (39.3)	17	40 (48.2)	43
	13小黒坂	2 (25.0)	6	5 (25.0)	20
	14土塚	2 (28.6)	5	9 (33.3)	18
	15桑戸	10 (45.5)	12	33 (56.9)	25
	16等々力	9 (25.0)	24	20 (30.0)	57
17赤尾	5 (45.5)	6	14 (31.1)	31	

割一ヶ村のみであると相当数が村内婚をしている。これは、従来いわれてきた上層農の通婚圏が下層農のそれよりも広いという説に反する結果といえよう。瀬川清子は、「幕府時代、庄屋や旦那の家では相当の家柄の者が村内にいないので、娘は村内に縁付けても、家の嫁は遠方の格式のある家から貰うことが多く」と述べているし、有賀喜左エ門も同様の指摘をしている。また、井戸庄三により、幕末、明治初期の徳島藩での戸数二百数十戸の二町・三村・一浦の調査結果から、上層で広く下層に狭いという、中でも隔絶山村においてとくにその傾向が強いという報告がなされている<sup>30)</sup>。ところが、筆

者の調査では、隔絶山村の色彩の濃い柳平で、それに甲州街道の宿場で隔絶山村とはいえないが、四キロ圏内に自村の他に三村しかない初鹿野においては、上層の村内婚率がとくに高い値で示されたのである。

こうした結果に対して、筆者は次のように考える。従来定説となっている「上層農は村内のみあう相手がないから、あるいは少ないから」という前提が必ずしも正しい見解とはいえないのではなからうか。というのは、結婚相手の絶対数は確かに少ないが、この限られた上層内での通婚はかなり頻繁におこなわれていたと考えられるからである。柳平の例をとってみると、上層農一二戸のうち七戸が村内婚であり、その中で長百姓の瀬兵衛と四郎兵衛、それに下人所有者の九右エ門が三者共に代々名主・長百姓を務める四郎右エ門の娘たちを嫁にもらっており、また、下人所有者の源右エ門の妻は、元名主の九兵衛の娘であることが確認できた<sup>31)</sup>。西野においては、上層農五五戸のうち一七戸が村内婚であり、その中の一一戸が、過去の宗門帳により、嫁の実家も同じく上層農であることが判明した<sup>32)</sup>。長百姓(のちの名主)左次兵衛は、名主左エ門の娘を妻としており、同家は、その後も代々村内の同等の役人層との通婚を続けてきたという<sup>33)</sup>。このような村内上層部間での通婚は、その多くが血族結婚となり、甲州の農山村ではかなり一般的な現象といえよう。これは甲州の多くの村落が、社会的にとび抜けた一人の名主を頂点とした村落構成をとってはいなく、数戸の上層農が持ち廻りで役職を務めるような構成をとっていたことに起因するのではなからうか、と考えることができる。



## 五、通婚圏の変遷

幕末、明治以降においては、先学の成果によれば、通婚圏は時代を経るにつれて拡大していることが明らかになっている。ところが、近世においてその検討はまだなされていない。そこで、筆者は、資料の限度はあるが、近世における通婚圏の変遷を概観してみたい。柳平では延宝二年（一六七四）から正徳五年（一七一五）までの四

表4 通婚圏の変遷

	年 代	入婚者数	村内婚者数	4km圏内 (村内除く)	8 km 圏内	8 km 圏内
柳平	延宝 2(1674)	36人	17人(47.2%)	6人	13人	人
	貞享 4(1687)	40	18 (45.0)	8	14	
	正徳 5(1715)	57	24 (47.1)	12	21	
西野	延宝 6(1678)	89	41 (46.1)	37	12	6
	元祿11(1698)	111	56 (50.5)	37	16	2
	享保 8(1723)	115	60 (51.1)	37	12	6
土塚	宝暦 3(1753)	34	11 (32.4)	20	2	1
	天明 5(1785)	29	9 (31.0)	14	5	1

一年間、西野では延宝六年（一六七八）から享保八年（一七二三）までの四五年間、土塚では宝暦三年（一七五三）から天明五年（一七八五）までの三二年間の比較的短期間の変化しか追跡できなかったが（表4）、いずれの場合においても村内婚率の変化はほとんどみられなかったし、遠方婚者が増大する傾向もみられなかった。かくして、甲州では、近世中期においては通婚圏はほとんど変化せず、したがって村

落の封鎖性の程度も変りがなかったといえよう。

## 六、むすび

甲州において近世の通婚圏を検討した結果を要約すれば左記のとおりである。

(1) 村内婚率は大半の村落が二〇〜五〇%を示し、これは従来考えられていたほど高くはない。

(2) 都市、農村、山村別の村内婚率は、山村で高く、都市で低く、農村がその中間値を示した。

(3) 距離圏からの分析では、都市、農村、山村の区別なく四キロ圏内婚が六〇%以上を占め、八キロ圏内で通婚はほぼ完結されている。しかし、都市や駿信往還山麓道沿いの農村においては、八キロ圏外の遠方婚が他村に比べて多くみられた。

(4) 通婚圏域を変化せしめる要因として、交通路と共に、大河川とか尾根、峠等の地形的要因がかなり働いていた。

(5) 階層的通婚圏について、村内上層間での通婚が多くおこなわれていたため、従来定説となっている「上層に広く、下層に狭い」という結果は得られなかった。

(6) 近世中期において、時代の経過に関係なく通婚圏はほぼ一定していた。

## 八付記

本稿を作成するに当たり、名古屋大学文学部地理学教室の井関弘太郎教授、石原潤助教授に御指導をいただいた。また、同教室の大

学院、学部 of 諸賢に、現地では葦崎工業高校の弘田文範教諭、山梨県立図書館郷土資料室の各位、西野の中込虎一氏に多大な協力をしていた。付記して感謝の意を表します。

注

- (1) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』日本評論社、一九四〇、四八六～五〇九頁
- (2) 山本登「通婚関係よりみた山村共同体の封鎖制と平等性」『社会学評論』一一三、一九五〇、一二三～一五一頁
- (3) その他に、血縁的側面、職業的側面、宗教的側面からの考察がある。―小山隆「通婚圏の意味するもの」『高田先生古稀祝賀論文集』一九五四、三九五頁
- (4) 井戸庄三「幕末・明治初期の通婚圏―徳島藩明治三年戸籍の分析」『人口・労働力の歴史地理』歴史地理学会紀要、一九七二、八七～一〇九頁
- (5) 関口武・森藤勝元「村落通婚圏に関する諸問題その1―村落の機能による通婚圏の相違(島根半島中部諸村落の例)」『地理学評論』一九、一九四三、四三一～四五〇頁
- (6) 池田義祐・佐々木永滋「現代大都市社会における通婚圏について」『社会学評論』二六、一九五七、五七～七一頁
- (7) 八木佐市「通婚圏調査に関する二・三の問題」『ソシオロジ』二、一九五三、一一頁
- (8) 合田栄作『通婚圏』大明堂、一九七六
- (9) 有賀喜左エ門『有賀喜左エ門著作集VI、婚姻・労働・若者』未

来社、一九六八、三三頁

- (10) 瀬川清子「遠方婚姻」柳田国男『山村生活の研究』所収、国書刊行会、一九三八、二三八～二四二頁
- (11) 前掲(2)
- (12) 前掲(4)
- (13) 荒居英次「近世漁村の通婚圏―房州相浜村の場合―」『近世日本漁村史の研究』新生社、一九六三、六五一～六六二頁
- (14) 速水融「濃西条村の人口資料―安永二年～明治二年―」『研究紀要』徳川林政史研究所、一九七二、一七一～一九〇頁
- (15) 前掲(1) 四九二～五〇〇頁
- (16) 関口武・森藤勝元「村落通婚圏に関する諸問題その2―島根半島中部諸村落の通婚圏の時代的変遷」『地理学評論』一九、一九四三、六五〇～六六二頁
- (17) 前掲(5) 四三五頁、四四七頁
- (18) 服部治則「西山村の社会」『西山総合調査報告書』山梨県教育委員会西山村総合学術調査団、一九五八、八九～一一二頁
- (19) 前掲(3) 六五三頁
- (20) 前掲(4)
- (21) 資料の欠如で考察できなかった都留郡、河内領を除いた国中地方が対象となる。
- (22) 関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館、一九五八、二二六頁
- (23) 柳平は平賀正道氏、西野は中込虎一氏、他は山梨県立図書館蔵の宗門帳である。

Marriage Pattern and Population Mobility in Kai(甲斐) Province during the Edo Period

Tsunetoshi MIZOGUCHI

After examining the marriage pattern of 17 rural communities in Kai Province during the Edo Period, the author obtained the following remarks.

- 1) The percentage of couples who were married within a community was from 20 to 50 % in each community, and these figures differ little from those in the Meiji Period.
- 2) The proportion of couples married within a community was the greatest in mountain villages and the smallest in towns.
- 3) In all the communities, the percentage of people who chose their spouse within 4 km. from their settlement was at least 60 %, and those who found their marriage partner within 8 km. was at least 72 %. There is a marked tendency that the inhabitants of towns and villages located on the main roads chose their spouse from remote areas.
- 4) Natural barriers like rivers and mountains influenced the migration pattern.
- 5) Concerning the intra-class marriage within a community, many researchers thought that its proportion in the higher class is smaller than that in the lower class, because higher class peasants were so small in number in a community that they would choose their spouse from remote areas. But in this study, the author obtained a different result from traditional ideas. The difference between the higher and the lower classes cannot be found in this respect.
- 6) Migration pattern was almost the same throughout the Edo Period.

- (24) 甲斐国志による。
- (25) この区分方法をとるのは当時の距離の単位が一里(四キロ)であったことと、先学が多くがこの区分方法をとっていて比較できるといふ利点があることによる。
- (26) 四キロ圏内のすべての藩政村の戸数を甲斐国志により集計した値である。
- (27) 前掲(2) 一三七〜一三九頁
- (28) 前掲(4) 九〇頁
- (29) 前掲(10) 二三八頁
- (30) 前掲(4) 一〇四頁
- (31) 柳平の延宝三年、貞享四年、正徳五年の各宗門帳による。
- (32) 西野の貞享五年、元禄一年、享保八年の各宗門帳による。
- (33) 中込虎一氏談